

第55回 姫路文化賞

たかみ くにいち

高見 國一 (刀工)



火炉（ホド）の前に座り、炎に立ち向かい鋼と対峙する高見國一さんの姿は、何か使命を全うしようとする厳しさを感じさせる。それはどこから来ているのか。

昭和48年、兵庫県佐用町に生まれ、奈良県無形文化財保持者の刀工、河内國平氏に入門し、平成11年に独立。生まれ故郷の佐用町で鍛刀場を開設するまでの7年間、とても厳しい修業を乗り越え、確実に技術と精神を鍛え上げられた。

刀鍛冶を志したのは、高校生の時になぜか日本刀に心を惹かれ、脳裏に焼き付いた日本刀が消えることはなく、「同じ人間が作ったのだから、自分にもできるんじゃないか」という思いに至ったからだという。

平成10年からは、国内で最も歴史がある日本刀のコンクール「現代刀職展」に連続出品をし、数々の受賞を重ね、昨年は最高賞の高松宮賞を受賞し、これまでの受賞歴が認められ、今年度、晴れて無鑑査に認定された。無鑑査とは、名人ということであり、全国でもわずかな刀工しか認定されていないが、その中でも、最年少での認定となった。

ここに至るまでには、多くの喜びや、困難があったことだと思うが、特に平成21年の兵庫西・北部豪雨では、佐用町に甚大な被害をもたらし、高見氏の鍛刀場も、水害に見舞われた。3か月間仕事が出来ず、ひたすらに、仕事場の修繕を余儀なくされた。この様に、如何なる困難も、自ら受けて立つ姿勢が、高見氏の持ち味であり、生き方なのだ。我慢する事の大切さを具現化した人物だといえるであろう。

研ぎ澄まされた精神が宿る作品によって、今後も多くの方々に魅了し続けるに違いない。

明珍 宗裕 (刀工)

略 歴

平成4年(1992) 兵庫県立佐用高等学校卒業

刀工河内國平(無鑑査、奈良県無形文化財保持者)に入門

平成6年(1994) 柳村仙寿氏(無鑑査、岡山県指定重要無形文化財保持者)に刀樋やタガネの基本を学ぶ／平成9年(1997)(～13年) 国選定保存技術「日刀保たたら」村下養成員としてたたら操業に従事／平成10年(1998) 文化庁より「美術刀剣類製作承認」を受ける／平成11年(1999) 独立高見國一鍛刀場設立／平成28年(2016) 大阪芸術大学通信教育部工芸学科卒業(学士号(芸術)取得)

受 賞 歴

平成14年(2002)・平成20年・平成24年・平成25年・平成26年 新作名刀展優秀賞

平成15年(2003)～平成17年・平成23年 新作名刀展努力賞

平成18年(2006) 新作 名刀展全日本刀匠会会長賞(特賞)

平成19年(2007) 新作名刀展日本美術刀剣保存協会会長賞(特賞)

平成20年(2008) (財)日本美術刀剣保存協会第43回全国大会一本入札鑑定／「地位」

平成21年(2009)・平成27年・平成28年・平成29年・令和元年 新作名刀展薫山賞(特賞)

平成20年(2008)・平成21年 第三回・第四回お守り刀展覧会刀身の部テレビせとうち賞

平成22年(2010) 新作名刀展日本美術刀剣保存協会会長賞(最高賞)

平成23年(2011) 第2回「新作日本刀・刀職技術展覧会」金賞

平成27年(2015) 兵庫県芸術奨励賞

平成30年(2018) 新作名刀展高松宮記念賞(最高賞)

令和元年(2019) 無鑑査認定

展 示

平成14年(2002) 「日本の名刀と播磨の刀展」出品(龍野市立歴史文化資料館)

平成18年(2006) 「河内國平とその一門」出品(生駒市芸術会館)

平成20年(2008)～平成24年(2012) 第一回～第三回「日本刀の匠たち私の最高傑作」出品
(佐野美術館)

平成22年(2010) 「銀座に刀鍛冶が、やってきた!-刀匠河内國平ギャラリー&トーク-」出品
(銀座おとな塾)

平成24年(2012) 「兵庫の名刀展」出品(姫路市書写の里・美術工芸館)

平成25年(2013) 「THE 世界一展」に刀工高見國一として展示協力

(うめきた・グランフロント大阪「ナレッジキャピタル」)

平成26年(2014) 「THE 世界一展～極める日本!モノづくり～」に刀工高見國一として展示協力
(日本科学未来館)

第55回 姫路文化賞



よしだ じゅんいち
吉田 純一 (美術)

ギャラリー歓創居では毎年、丸投三代吉ゆかりの作家の展覧会を催しています。その準備のさなか、吉田さんが、愛読書を片手にスケッチブックを持って来られました。開くと、まるで落書きのようなタッチで描いた、ふくよかな女性のパステル画でした。

それは、力強く洗練された線、色艶の美しいバックのセンス。私は、雑然と描かれたその絵に引き込まれていました。

画業50年、僕は素人ですと言い切る、吉田さんの絵画は、単なる奔放さや豊かさとは少し違い、絶妙な色力と空間とのバランスが、観る人を和ませる、まさに、吉田流と言えるのではないのでしょうか。文学青年のまま絵描きになった吉田純一さんです。

丸尾三千代 (ギャラリー 歓創居)

本の番人、吉田純一さんは、二〇〇九年二月九日、六三歳の誕生日に「九濃文庫」をオープンさせた。今年で十年となる。二万冊を優に超える蔵書が民家の奥の奥まで並んでいる。

吉田さんは、二〇〇七年七月に森画廊のオーナーだった、故森崎秋雄氏が発行された「美の風」に興味深いエッセイを寄せている。吉田さんは、画家として作品も多く、これまでも展覧会で発表を続けてこられ、故森崎さんとも親交が深かったが、エッセイは、絵画についてではなく、小説家小山清の紹介と小説『落ち穂拾い』の作品についてであった。

このエッセイを読んだ人はあまり知られていない小山清という作家の作品を読んできたくなる。そして読んで気づくのである。主人公の「僕」が吉田純一さんと重なることを。また「僕」が惹かれた古書店の少女の、本を愛して生きる姿が、九濃文庫の基にあることを。吉田さんが「心洗われる」小説を多くの人々と共有したいと願うのは、吉田さんの美学であることを。

本好きは「九濃文庫」を訪れると、高揚せずにはいられなくなる。そして本の森に足を踏み入れる。本の森の番人、吉田さんが、さらに深く本の森へ誘ってくれる。

本を愛し、本を読む暮らしを、吉田さんはこれからも多くの方々に広めて行かれることだろう。

吉田 ふみ糸 ()

プロフィール

九濃文庫 (くのうぶんこ) 店主

[私設図書館/たつの市龍野町日山435-2 (平成21年2月9日開設)]

姫路美術協会会員

九濃文庫にての催し

2015年11月 第一回山高登装幀作品展

2016年11月 第二回山高登装幀作品展

2018年 9月 小沼丹生誕百年祭

これからの予定 2023年 佐多稲子没後25年展

文化功労賞

くぼ かずと
久保 一人 (地域文化研究)



久保一人さんは、長らく加古川市役所に勤務され、最後には特別職の要職を歴任されました。在職中には日展作家（日本画）の故宮崎亮吉氏に師事し研さんを積まれ、加古川市美術展において入賞する伎倆を発揮されるなど創作者としての実績を残されました。

その一方で、若き頃から播磨地域の日本画家や書家たちを調査研究するとともに、関係作家たちの作品をコツコツ収集してこられました。

その成果は「播磨ゆかりの日本画家三人展」（平成 27 年）や「明治の天才書家伊藤明瑞展」（平成 29 年）という展覧会の図録に結実されました。ともに明石市に住まわれた土屋嶺雪と伊藤明瑞の両氏をとりわけ集中的に調査し、知られざる業績を明らかにしたことは、おおいに特筆すべき功績ではないかと思えます。

また、学生時代から実証的な歴史研究に取り組み、史学研究の基本ともいうべき史料批判を通して、郷土自慢に陥らない物の見方で「中世・近世前期の東神吉～播磨神吉城主神吉氏の興亡～」(平成 11 年、私家版)を刊行しています。

このように、創作者として、また美術作品の研究、地域の歴史の再評価など長年にわたり多方面で地域文化の振興に尽くされた業績の数々は「文化功労賞」の名に値するものと考えられます。

岩坂 純一郎 (加古川市文化連盟会長)

略 歴

昭和 49 年 (1974)3 月 21 日 立命館太学文学部史学科日本史学専攻卒業 (学芸員資格)

昭和 49 年 (1974)4 月 1 日 加古川市役所入庁 (総務部管財課勤務)

昭和 60 年 (1985)4 月 1 日 ～平成 2 (1990) 年 3 月 31 日

加古川総合文化センター開設準備室及び同館勤務、施設管理、美術展・博物館特別展等を担当 (「加古川市展を観る歴代審査員展」・「森月城展」・「写真で見る明治・大正・昭和初期の加古川」等)

加古川市教育委員会教育総務部長・市総務部長・市監査委員・市副市長等を平成 26 年 (2014) 年 7 月まで歴任 (平成 24 年 (2012) 3 月 31 日 加古川市役所退職)

昭和 51 年 (1976) 宮崎亮吉画伯主宰の「研画会」(のち「青亮会」)で日本画を学ぶ

平成 11 年 (1999)7 月 1 日「中世・近世前期の東神吉」自費出版

平成 28 年 (2016)「播磨ゆかりの日本画家 (福田眉仙・森月城・土屋嶺雪)3 人展」を企画実施 (松風)

平成 28 年 (2016)「自然の美を求め続けた日本画家宮崎亮吉展」を企画実施 (松風)

平成 29 年 (2017) 明治の神童書家伊藤明瑞展」を企画実施 (於加古川市立松風ギャラリー)

受賞歴

加古川市美術協会展・奨励賞

加古川市美術展 (日本画の部)・市長賞・美術協会長賞・美術協会長賞

加古川市・高砂市合同美術展・合同美術展賞・美術協会賞

兵庫県日本画家連盟公募展・兵庫県文化協会賞・奨励賞

平成 27 年 (2015)6 月 15 日 加古川市功労者表彰

現在

加古川市民病院機構監事／加古川商工開発株式会社常勤監査役／公民館・地域で講演活動

文化功労賞

ふくもと のぶこ

福本 信子 (文学)



父が文筆家を目指していたことを父の知人から聞かされ、書くことへの思いが募っていった。

東芝短編小説佳作入選を皮切りに、地域のおばさんたちとエッセイ教室を開きながら西姫路「ふるさと新聞」に、ドリームおばさんエッセイは17年間収録され出版された。

22歳の頃、作家・劇作家の獅子文六邸にお手伝いさんとして住み込み、応接間での作家や俳優との交友を描いた「獅子文六先生の応接室」は30数年かかり出版した。

主婦の目線で書いたエッセイを神戸新聞に応募し、次々に入選を果たし、力をつけていった。「ふるさとの城は」詩と写真で構成し、評価を得た。

「やさしい人」は岩田夫人（獅子文六）夫人の幸子さんの思い出、5時間にわたって岩田先生に訴え続ける三島由紀夫氏のこと、著者の姿が生き活きと描かれている。この作品集は事実在即し、ストレートにぶつけ、描かれた人物の魅力を余すことなく伝えてくれている。読後感がよい。

「先生は無名の書き手たちの作品は、そのほとんどが誰に読まれるでもなく打ち捨てられてゆく、せめて俺が、読むべきでなかろうか」「K先生への手紙」は、この言葉に感動した著者が「一度でいいから生きておられるうちにほんの少しでもいいからお話がしたかった。」と結んでいる。

「これからは平和のことを考え。人々の暮らしを見つめていきたい」と抱負を語っている。

守谷忠彦（フォークシンガー）

略 歴

姫路市生まれ

- 1963年 東芝短編小説佳作入選
- 1972年 貿易振興会懸賞論文入賞
- 1985年 中内 功（ダイエー社長）懸賞論文入賞
- 1988年 「神戸市民の学校」にて現代詩を学ぶ
- 1990年 西姫路「ふるさと新聞」でミニエッセーを17年間連載
- 1994年・2003年・2010年 講談社出版サービスセンターにて『ふるさとの城は』詩集出版
- 1994年 郵便局・姫路特推連「ふるさと企画」にて詩集の中の8編を絵ハガキとして出版される。
- 1994年～2007年 神戸新聞文芸欄に投稿をする
- 1998年 岩手県衣川村「星星の街・あおぞらの街」全国エッセイコンクールに佳作入選
- 2003年 影書房にて『獅子文六先生の応接室』-「文学座」騒動のころ-出版
- 2008年 姫路市文化振興財団助成事業として「綱を一緒に…」・「やさしい人」・「着物の染み」・「すず虫」・「家のおばあちゃん」などエッセー入選を、影書房にて神戸新聞入選作作品集として出版
- 2018年 工房ノアにて「K先生への手紙」出版

活動歴

- 姫路読書会「鷺の苑」編集長
- 兵庫県地域ビジョン委員及びアドバイザー
- エッセイ教室約10年間開設
- 片岡家古民家「雑学塾」文章教室担当

特別賞『国際文化交流』



きむ そよん

金 素栄 (映画監督)

姫路労音の「第九合唱団」が日本在住の韓国人監督の手でドキュメンタリー映画になると聞いたとき、私は咄嗟に「それは面白い」と思ったことを覚えています。日本人にとっては当たり前になっている、けれどよく考えてみれば奇妙な「年末に第九を唄う」という習慣と、そこに集う人々が、外国（しかもお隣の国）の映画監督の目にどのように映るのか、観てみたいと思ったのです。

けれど、映画の自主製作の大変さ（おもに資金集めと劇場公開の壁）もそれなりに知る身としては本当に完成して日の目を見ることが出来るのだろうか？完成&公開させたいばかりに妥協を重ね、単なる身内受けのご当地映画になりはしないか、と懸念したのも事実。

けれど、そんな心配は杞憂でした。映画はまさしく「プロ」の「作品」だったのです。「姫路」も「労音」も作中でのクレジットは一切無し。登場人物たちの名前もしかり。分かるのは「日本の地方都市で第九を歌う人たち」ということだけ。練習風景、夫婦や家族の会話、日常の暮らし…。淡々と映し出される彼らの姿を通して、彼らにとっての「第九」、そして彼らと「第九」との幸福な関係が明らかになっていきます。

観ながら私は「こんな関係は映画では作れないなあ。音楽って凄いなあ。」と嫉妬にも似た気持ちが沸き起こってきたのを覚えています。「第九」の「音楽」の偉大さを映像で見事に描き出したキム・ソヨン監督。これからの活躍にも期待しています。

内海智香子（姫路シネマクラブ）

プロフィール

1968年、韓国ソウル生まれ。

韓国外国語大学フランス語学科へ進んだ後、韓国映画界で演出スタッフとして映画の仕事を始め、2000年にアジアのピカソと称されたウズベキスタンの韓国系画家、申順男の芸術世界と作品を通してスターリンによる強制移住の歴史を描いた35mm長編ドキュメンタリー映画『空色の故郷』で初監督。

その作品は釜山国際映画祭ウパ賞（韓国最優秀ドキュメンタリー賞）、ソウル国際ドキュメンタリー映画祭大賞、山形国際ドキュメンタリー映画祭スペシャルメンション賞、台湾国際ドキュメンタリー映画賞 NETPAC 賞（アジア最優秀映画賞）を受賞。

その他、アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭、ニューヨークアジアン・アメリカン国際映画祭、フランス国際オーディオ・ビジュアル映画祭などに招待。

来日した後、神戸大学大学院で映像人類学を研究。

2019年にベートーベンの「第九」をテーマとした長編映画『ルートヴィヒに恋して』を公開。

第38回 黒川録朗賞

きたやま まさこ

北山 眞佐子 (文学)



現代では珍しいと言えるストーリーテラーとしての才能が期待される作家である。

兵庫県看護功績賞を受賞されている優秀な看護師、その指導者として、長年培われてこられた知識と幅広い人間観察の目、そして厳しくも“人”へのあくまでもやさしい豊かな愛を土台に紡ぎ出される物語は、快く素直に読む者の心を惹きつけ癒す。

出版されるご本の表紙・カットを飾るのは夫君の北山直一氏である。誌名『川は流れて』『追い風』『追憶』等と併せて読者はすでに作家の人柄と暮らしをプレゼントされ、何かほのぼのとした〈希望〉を喉元に読み始める。

キャリアウーマンとして、家庭も守り、周辺の人々とも親しみながらシャンソンを歌う、人間大好きな作家の出現である。

気取りのない語り口、筆さばきは、読者にいつの間にか作家と喜怒哀楽を共にさせてしまう巧まざるして巧みな力を持っている。

「もうこれ以上遠まわりしないわ」「心豊かに自分らしく歩いてゆこう」。帯文の言葉である。

専門分野を持つ作家の強みを生かし、大いに意欲的且つロマンあふれる作品を産み出してほしい。それが叶う作家である。どうぞ欲張って下さい。

柳谷郁子 (作家)

略 歴

- 1946年 兵庫県に生まれる
- 1968年 国立姫路病院附属高等看護学院卒業。国立姫路病院に就職。
- 1974年 出産：育児のため退職。
- 1977年 藤森看護専門学校、姫路市医師会看護専門学校で勤務し2007年に退職。
- 1997年 「播火」同人誌に参加し、以後エッセイ『老いを看まもる』、小説『あれから』『思い出探し』『籐の椅子』等を発表。
- 2005年 『フーヘン (約束)』にて第4回アングラ文学賞佳作入選。
- 2008年 小説『川は流れて』(ほおずき書籍)出版。
- 2011年 エッセイ集『追い風』(ほおずき書籍)出版。
- 2019年 短編集『追憶』(ほおずき書籍)出版。

現在

芸術文化団体「半どん播磨の会」常任委委員

日ノ本学園高等学校 非常勤講師

第38回 黒川録朗賞

ひがしかげ ともひろ

東影 智裕 (彫刻)



出会いは、兵庫県中部但馬の玄関口、生野町に立つ不登校を経験した生徒たちが通う全寮制の高校、生野学園高等学校に7期生として入学し、生徒と美術スタッフとして出会い、交流が始まった。当時は良き先輩たちに恵まれ、自由に活動していた。

高校3年生頃から才能(当時は絵画)を見せ始め、東京の美大に進学し良い刺激を受けていたようで、私が上京するたびに居酒屋に卒業生たちと集まり、大いに飲んで語り合い作品を見せてもらっていた。立体作品を持って来るようになってから、彼は確実に進んでいる。必ず作家になる、良い作家になると確信した。とにかくぶれることなく自由に進んでほしいと願っていた。

彼はぶれることなく進み、周りの人たちの目に留まり、自分の世界を表現し始めていた。多くの企画展にも参加させてもらい、龍野アートプロジェクト、姫路市立美術館でのグループ展等々、その成果が2016年五島記念文化財団から美術新人賞(この賞は現在活躍中の優秀な人たちが受賞している)を受賞し、1年間のポーランド留学。ポーランドでは地元の大学での講演など活動し、大いに楽しんで帰国しているが、その後もポーランドに行き作品を収蔵してもらい、広く世界と繋がりつつある。そのポーランドの成果を発表する大個展がある。私は大いに期待をしている。大いに羽ばたいてほしい、自分で掴んだ世界で遊んで楽しんでほしいと願っている。

椿野浩二(画家)

略 歴

- 1978年(昭和53年) 兵庫県高砂市生まれ
- 2002年 武蔵野美術学園造形芸術科卒業
- 2004年 武蔵野美術学園版画コース研究課程修了

受 賞

- 2012年 「第7回タグボート・アワード」グランプリ
- 2013年 「第8回タグボート・アワード」山口裕美賞
- 2014年 「第3回あさごアートコンペティション」スポンサー賞
「Young Creators Award 2014 vol.1」優秀賞
- 2016年 「五島記念文化財団 第27回五島記念文化賞」美術新人賞
- 2017年3月から1年間ポーランドのクラクフに滞在(五島記念文化財団の助成)

主な個展、グループ展、他

- 2011年 「東影 智裕 立体展」あるぴいの銀花ギャラリー 埼玉
- 2012年・2014年・2018年 「東影智裕 個展」ギャラリー島田 兵庫
- 2014年 「東影智裕展」ギャラリー上り屋敷 東京
- 2016年 「東影智裕展」Gallery 樟楠 埼玉 「東影智裕展」Gallery 子の星 東京
- 2018年 「Living in Light」Gallery Nomart 大阪
- 2011年・2013年・2016年・2017年・2018年 「龍野アートプロジェクト 2011 刻の記憶」 兵庫
- 2011年 「天の川紀行」ギャラリー La Mer
東京 「アート DE わん・にゃん展」あさご芸術の森美術館 兵庫
- 2014年 現代郷土作家展～藤原向意・松田一戯・清水浄・東影智裕 姫路市立美術館 兵庫
- 2016年 「生野学園 師弟三人展」ルネッサンス・スクエア 兵庫
- 2017年 「原田の森ギャラリー・リニューアルオープン展」原田の森ギャラリー 兵庫
- 2019年 「Nature in Art」MOCAK クラクフ現代美術館 ポーランド、日本ポーランド国交樹立100周年記念 ポーランド芸術祭
- 2019年 「セレブレーションー日本ポーランド現代美術展ー」京都、ポーランド その他パリ、スペイン、台湾などでも開催。

第38回 黒川録朗賞



ふかえ りょうた

深江 亮太 (洋楽・フルート)

スターになる人物には、華があります。

彼は、フルートを構えると音が出る前に、その姿から何かを放つ。中学生の頃、クラブはスポーツだった。でも、心に染みいるフルートの音を聴き、彼は決断した。人生はフルート奏者だと。

しかし、芸術家としてのスタートは遅く芸大に入って自分の立ち位置を思い知らされた。ただ、練習あるのみと。その時、遅咲きの小さな花が咲き始めた。

ウィーンのプライナー音楽院の尊敬する RezaNajfar 先生のもとにて5年間、時には絵葉書のような風景を眺めながら、ひたすら愛管と共に過ごした。

そして、帰国。多くの音楽家よりお誘い頂きコンサート活動の日々。彼は言う、「私はクラシックを一生の課題とする。作曲家の作意を深く感じ取り自分の想いを重ねて奏でる。」と。

彼の人生を飛躍させるために推薦します。

原田頑山 (邦楽家)

略 歴

兵庫県姫路市出身。

大阪音楽大学卒業。卒業演奏会、姫路市新人演奏会に出演。

オーストリア・プライナー音楽院を首席で卒業。

第8回高校生管打楽器ソロコンテスト関西大会第一位、全国大会優秀賞。

Flute を 赤穂由美子、待永望、竹林秀憲、Reza Najfar の各氏に師事。

留学中、ウィーン国立音学大学の Pro-arte Orchestra, バロック室内楽アンサンブル Musica Vitrioli などで3年間活躍。

『路面電車で行く 世界各街停車の旅 音楽の街ウィーン』の案内役でテレビ出演。

2016年、姫路市吹奏楽団とフルート協奏曲を共演。

Top Dog Records より自身のアルバムCD『Digital Dive』をリリース。

関西を中心に室内楽で活動する傍、音楽教室・プライベートレッスンで後進の指導も行なっている。

第38回 黒川録朗賞



ふるばやし かいげつ

古林 海月 (漫画家)

お酒が好きで、古代の酒造りの原点を描いた『米吐き娘』（2005年）を本屋で探して古林海月さんを知りました。神戸の海文堂書店さんに「姫路に住んでおられますよ」と教えていただいて、『わたし、公僕でがんばってました。』（2011年）を読み、ファンになりました。兵庫県の職員で、福祉事務所に勤務。生活保護家庭を訪問が仕事という内容です。その時に兵庫県出身でハンセン病で岡山の長島愛生園におられる患者さんにお餅を届けに行かれ、次の年に邑久光明園を訪問されて「ハンセン病について

何も知らない」ことにショックを受けて、マンガにと思われたのです。ハンセン病に詳しい蘭（あららぎ）由岐子さんの著書を読み、ファンレターを送り、編集の佐藤健太さんを紹介され、12年かかって『麦ばあの島』全四巻を刊行（2017年）されたのです。

イーグレひめじ3階の「あいめっせ」の図書室にあると聞いて借りて。姫路が舞台で親しく、方言で語られることにもなじめました。親兄弟や故郷から隔離された“患者”さんには、方言が自分の存在の証しでもあったそうです。主人公の麦ばあの人柄にも、おだやかな播磨人気が感じられました。それだけに物語の終わり近くで「人はまちがう」と言う麦ばあのつぶやきに胸を打たれます。重いテーマをマンガで表現されたことにも若い人にと期待できます。受賞を機に、姫路市内の学校図書室にと願います。姫路にすばらしい漫画家がおられることにも誇れます。

岩田健三郎（版画家）

略歴

鹿児島市生まれ。

実家は農業。

鹿児島大学、同大学院で日本民俗学専攻。

1993年から兵庫県職員として県立大学や福祉事務所などに9年間勤務後退職。

2003年、講談社の青年誌『イブニング』で第3回イブニング新人賞大賞受賞。

第2回小林まこと大賞受賞。

著書に『米吐き娘』（講談社）、『わたし、公僕でがんばってました。』（中経出版・KADOKAWA）

『海月ファームだより』（Kindle）、『麦ばあの島』（すいれん舎）など。

2014年から農業漫画8コマ漫画「海月ファームだより」をブログで連載。